

沖

5
2021

創刊50周年記念コンクール発表

俳句雑誌【お色】



終

電

能村 研三

対面句会の楽しみ

こつの要る抽斗ひとつ二月尽く
三月は四の五の云うてをられずに

終電てふ遠き記憶も朧かな

噂や構へてためす鋏使ひ

箒目の流れのままに別れ霜

一盞に刻みて晒す走独活

橋の名の由来を聞きし花明り

朧の夜記憶の中のくねり道

掃き痩せの土に降りたる落花かな

高枝に粗ごしらへの巣組かな

コロナ禍による二度目の非常事態宣言が解除されたものの、第四波の感染拡大が心配されている。そんな中、「沖」では三月から正式な「オンライン句会」が始まった。▽班、四班の二班体制で、それぞれ二十五名くらいの人が参加されている。二つの句会とも司会進行役の頼所友枝さんと栗原公子さんが手際よくさばいてくれるので、限られた時間でスムーズに進行している。九州、東北、富山、岐阜、愛知など遠方の人たちとも定期的に句会が開けることも大変有り難いことだ。

本誌でも、四月より「支部紙上指導句会」が始まった。これは従来、私が一年に一度は地方の支部へ伺って直接皆さんと触れあつて句会をしてきたものだが、それが思うように行き来が敵わないので、その代わりに始めたものである。

コロナ禍から一年を経て、句会の方法などいろいろ工夫をこらして対面句会を再開することになった。三月には「沖」の同人総会と同人句会が開催された。会場の市川グランドホテルは新年句会で使うところ、いつも百五十人くらい入る部屋に四十名くらいで会合を行った。

四月からは中央例会、東京例会が対面の句会を再開することになった。中央例会には主に市川近隣の方の出席を得て二十数名の方々が集まり、欠席投句の参加は七十名近くの方からいただいた。

久しぶりに行われた対面の句会は句友の生の声が聞けるもので、その有難さをひしひしと実感した。もちろん句会の後の二次会も行わなかったものの、顔を合わせての句会のすばらしさに興奮を覚えた。

これからはオンライン句会、紙上句会と並行しながら無理のない程度で対面句会も再開していきたいと思う

能村 研三

花莫座を

登四郎先生には何と言っても桜の句が多い。傍題なども遍く詠んでいるが、特に「花冷え」の句は二十句ほどある。

一句一句に先生の桜を見る角度、思い入れが違うことに勉強させられるのであるが、有名な句に、〈花冷えや老いても着たき紺紺〉があり、第三句集『枯野の沖』に載っている。更に全集を読み進めて、第五句集『幻山水』の中で、〈花莫座を敷くさらさら〉と花こぼしに出会った。

田舎の我が家には大きな桜の木があって、満開の時には村の人達がよく花見を催した。今でこそ花見の席にはブルーシートが重宝されているが、当時は一軒一軒が一、二枚の莫座を持ち寄った。頭上を花びらが舞い、莫座に置かれた重箱の料理には花びらが滑り込んだ。掲句には、もう疾うに鬼籍になってしまった人達が、和やかに笑い合っている姿が思い出される。と同時にそうした懐かしい人達が今も桜の雲の上で、心地よく踊っているようにも思えるのである。

椿挿す硝子の瓶に火の記憶
 低き山ばかり雑魚寝の山笑ふ
 島の土忘れじと踏み卒業す
 唸り上ぐ木地師の轆轤水温む
 木道を行くかたかごの花揺らし
 産卵の魚の瀬につく猫柳
 門までは春月抱いて帰りけり

蒼茫集

霞隠れ

矢崎すみ子

ダイヤモンドダスト光のメヌエット
 最澄の山雪すずめ笹すずめ
 等伯の龍の鱗や春を待つ
 わらべ歌尼と歌ひし堂遊糸
 遠つ富士霞隠れの水餅
 *佐保姫の繰る歌枕歌ことば

花前線

宮坂恒子

アルプスの無垢なる白さ二月くる
 磐石を拭ひて落つる雪解滝
 天心へ意気込む太さ朴の芽は
 湖風に耐ふる容の座禅草
 陣形をしかと組みなる帰白鳥
 *花前線巨船のやうに北上す

星よりの使者

辻美奈子

星よりの使者来て灯す雛の燭
廃屋が海を見おろす春北斗
嘴の羽ねぶりあふ鳥の恋
*分流し合流し身を巡る血のおぼろ
鳥帰る日の爪を切る音つよし
雲雀野や歩けば歩幅生まれくる

酔余の水

千田百里

芽柳や何処かが揺れてゐる地球
魚は氷に上り大使の馬車が往く
陽炎のつまづく議事堂前あたり
*涅槃図の余白は民の嘆く場所
三鬼の忌酔余の水のほろ苦く
再読に新たななる謎亀鳴けり

川も港も

荒井千佐代

泣きながら流されてゆく雛あらむ
鶴帰る国際墓地のいま真上
被爆せし川も港も桜かな
パイ生地には刷毛を走らす蝶の昼
*屋根替の下りて屋根見る青空も
一途なる女は脆し濃山吹

木の根開く

埴誠一郎

春の風邪聖書の赤き前小口
*木の根開く太宰治の通信簿
「次の方」と呼ばれてやをら納税期
ためらはずジェネリックでと春コート
古利根や佐保姫の乗る渡し舟
ばば引いて澄まし顔なる春炬燵

枕 元 菊川俊朗

梅咲いて兜太の鮫の来てをりぬ
子に未来あり三月の枕元
春や春雲の本意は浮かぶこと
原つばの子が消えてゆく春の暮
* 春燈や三面鏡にある無限

フェンシング 道端 齊

深雪晴十六連符の軒雪
振り払ふ傘の重みや春の雪
警策の響き鋭き余寒かな
廻廊に波音寄する余寒かな
* 三月の光突き合ひフェンシング

乳張るころ 井原美鳥

山祇も雨域に入りし雉子のごえ
* 本文と凡例行き来して朧
麦青む乳張るころの疼きもて
屋根の上に海を置く町燕来る
空あふぐ一心捨てだいこんの花

更 紗 平松うさぎ

* 喜びに少しの狂気花ミモザ
あたたけし更紗の包む古書二冊
淀みなく布織るごとし春の波
土の香の強く湧き立つ木の芽雨
花の雨流るる酒船石の溝

円周率 小林陽子

* 総帆を展ぐや佐保姫の御成り
円周率の永遠に続き春の月
マトリョーシカ並べる遊び鳥雲に
風切羽の青き一閃復活祭

大俎板 木村あさ子

大魚寝かす堅雪の大俎板
手焼煎餅の香のふくるるや春の空
ほはほはの日輪かかげ春吹雪
囀へ応へさうなる石仏
* 白神の雪解の水の猛猛し

一汁・二菜 中村重幸

* 鬼よりも恐ろしき人豆を打つ
浅春や楽器ケースの赤き布
一汁と一菜全て春のもの
安曇野の光となりぬ芹の水
海光の島の斜面を耕せる

雪解けて 阿部眞佐朗

春は曙玄米の炊き上がる
卵かけご飯の黄身に春立てり
* 雪解けて国境開く山河かな
一振りの軍刀を抱く余寒かな
御隠居と呼ばれるもよし春の水

豆の穴 和田満水

* 啓蟄や豆煎餅に豆の穴
佐保姫を掠つて風の今宵かな
枕頭に初鶯のうすあかり
言ひたげな子が言はず出る春炬燵
春炬燵出るや猫似の背骨熨し

霏晴れて 大橋松枝

* 草青む杭のやうなる牛の脚
風に起つ篝の熾火養花天
斎竹の幣守り札に春夕焼
霏晴れて林道匂ふ春子楢
春の海岩間の窪に稚魚の群

沖作品



能村研三選

本堂に朝の御勤め冴返る

千葉

水谷 昭代

* 冬晴の富士は完璧過ぎないか
捨鉢にもの芽青くたくましく
作り手の祈りが揺れる吊し雛

うららかや四角い部屋を丸く掃く

市川市

澤田 英紀

* 立春立志青年となる一日

月冴ゆる浪逆なみさかの海を宥めつつ

薄氷を渡りし風の尖りをり

冴返る刃文浮き立つ富士の峰

玻璃越しの陽射しに和む二月尽

千葉

関 妙子

黙禱の人らに春の海光る

折紙の得意な男の子雛祭

* 老境に入るとふことの煮凝れり

鎌倉の海の作光仏座す

また一つ消えし老舗や冴返る

いつときは庭も盆景春の雪

* 蘆芽ぐむすいと漕ぎ出る小舟かな

鳥影の行き交ふ樹間春浅し

留鳥の潜む水辺や葦の角

如月の梢明るく師の忌なる

青空を引き寄せ大樹芽ぶきをり

* 草仮名のごとき小流れ路の臺

山巒の残雪けぶる国境

風紋の果茫茫の春怒濤

誰もぬぬひと日過ごせり雛祭

* 伝へ聞く神座す山の忘れ雪

鳥帰る無垢の空へと一直線

鴉の巣網を丸める知恵ありて

風連れて蒲公英の絮すさびゆき

熊谷 成子

江森 悦子

浜崎喜美子

彩雲を纏ひて春の夜が明ける

鈴木 和江

* 初午のまだ湯気上ぐる小豆飯

大太鼓連打の響き冬怒濤

寒林の幹を透して陽が昇る

末黒野の川面拡げる月明かり

* 夢の緒を手繰り手繰りて朝寝かな

存ふる苦さもあらむ露の臺

憎まれ口叩き笑顔で卒業す

田を返すカン太カア子を従へて

大和路の風は早緑草だんど

雪解雫ポルカのやうに弾みけり

長野

山岡 純子

刀剣に龍の彫りもの春一番

面長の雛の古色に和みある

* 春の日に灰と色めく鉛筆画

ほろ苦き想ひ出もよしフリージア

愛猫の過呼吸寒の夜の底

埼玉

浜田はるみ

* オリオンが傾ぐ何時かは来る訣れ

臘梅の香や二歩過ぎし後ろより

鳥の声降る寒明けの空に触れ

神奈川県

加賀 莊介

栃木

五十畑悦雄

千葉

牛島 晃江

* 佐保姫の銚杉の鏝解きに來る

料峭や松籟に耳あづけをく

蛤の椀の白濁明日に生く

日時計の影が短くなりて春

生き様てふ宿題抱へ卒業す

* 動かざる象にも春愁あるらしく

佐保姫がボレロのリズムでやつて來る

点滴の音無きあはひ春の雪

* 点滴終へ九時消灯の春の月

癒えて踏む大地の鼓動犬ふぐり

人生に近道は無し地虫出づ

石川

坂下 成紘

飛鷹選評



能村 研三

冬晴の富士は完璧過ぎないか

水谷昭代

富士山はいつ見ても、どこから見ても美しい山だが、冬に見る富士山は純白の衣をまとった姿が特に美しい。さらに空気が乾燥して晴れ渡った冬空には遠くからも見ることができる。あまりにも整った姿に、作者は「完璧過ぎないか」と肯定的な疑問を投げかけながらも最大の賛辞を送った。

立春立志青年となる一日

澤田 英紀

江戸時代の成人式とも言える元服は、数えて十五歳頃の立春に行われた。戦後は二十歳で行われる「成人の日」に変わった。大人になるという自覚と人生の目標を持ち、しっかりと前に進んでいく決意をする日でもあった。そんな若い頃の気持ちに立ち返って志を新たにするものがあつた。

老境に入るとふことの煮凝れり

関 妙子

煮凝りは煮魚をその煮汁とともに一晩置いて凝固させた料理で、冷やかな舌ざわりにうまみを感じる。その色彩にはこれまでの様々な思い出が凝縮しているようだ。老境を迎えこれまでの甘い思

い出も辛い思い出も、確かに煮凝りのようなものと言えるかもしれない。

蘆芽ぐむすいと漕ぎ出る小舟かな

熊谷 成子

春浅い水辺に突き出た蘆の芽は、季節の息吹を感じさせてくれる。水辺に鋭い芽が角のように生い出るので、蘆の錐とか、角組む蘆などと言うが、そんな中を一艘の小舟がすいと漕ぎ出て行った。

草仮名のごとき小流れ路の臺

江森 悦子

草仮名とは草書に書きくずした万葉仮名のこと、これをさらに簡略化したものが平仮名である。雪解けの小流れから顔を出した路の臺は春の到来を感じさせる。

伝へ聞く神座す山の忘れ雪

浜崎喜美子

春先、忘れたころに降るような雪。忘れ雪とは名残の雪、雪の別れ、別れ雪などとともに、いずれも最後の雪に心を寄せたことばである。これも山に棲む神の作業としたことが面白い。

初午のまだ湯気上ぐる小豆飯

鈴木 和江

初午は二月九日あたりで、お稲荷さまの縁日で稲を象徴する穀霊神、農耕神が祀られている。その神様にお参りして五穀豊穣を祈り、小豆飯を炊いて食べる習わしがある。またこの頃は春の寒さがあるところで炊いた小豆飯から湯気が上がっていた。

森村 江風
神輿の町

春立つや木地師木を選る指の腹
 浅蜷汁飯とかつ込み朝を急く
 春雷や彫師の鑿に龍の浮く
 宮雉や紙垂あらためて四方の風
 船渡御の龍の舳先が川を割る
 蔵跡の西日ぢりぢり鹽の町
 潮焼けの皺は強面土地ことば
 神棚へ晒託して祭待つ
 悶着を重ね重ねて宵祭
 天へ地へ差し擦る放る荒神輿
 咆哮す宮入拒む荒神輿
 祭笛尽きて小若は母の胸
 御霊返し神輿巨体の息を抜く
 潮入に町挟まれて鯨日和
 虫すだく屋号息づく旧街道
 数へ日や鑿打つ音に乱れなし
 三が日鋸師謝する座り胼胝
 匠とて名を残さざる冬銀河
 大寒の底で座職の煮る膠
 塗師の篋光均して春隣

小倉 征子
神 遊 び

冬の辻肩の痩せぬる猿田彦
 水涸るる鷺の狩場を過ぎてより
 午後の田に人をらずなり冬雲雀
 麦の芽に雲の行き来のただならず
 旅を継ぐ冬田越えても冬田かな
 軒に吊るもろこし隠れ里の冬
 格子戸の拭き窪みたる神楽宿
 闇払ふやうに楳木を足しに足し
 冬霧の村に一夜の氏子なる
 炉あかりや一音狂ふ馴らし笛

方二間自在に使ひ里神楽
 狼籍を尽くし神楽の道化神
 振舞ひの猪汁と酒なほ辞さず
 白息を乱し八岐大蛇討つ
 酔ふ囃す囃し倒され神楽鬼
 一徹に神楽の笛の座を守り
 岩戸開き晴れ晴れと吹く神楽笛
 酔ひどれて神となる夜の炉火熾こる
 夜神楽の祝者に賜ふ縁起餅
 暁闇の星限りなし神楽果つ

須賀ゆかり

佞 武 多

熱情を秘めて真白き佞武多小屋
 若葉風鈴選るときは目を瞑り
 夕焼や笛の音に和ぐ港町
 静けさの岬をつなぐ夏つばめ
 白南風や海へ太鼓の総稽古
 海光へのんびり消ゆる氷菓売
 夕風や光の塊の佞武多発つ
 肌脱ぎて曳手は夜へ漕ぎ出せり
 灯されていよよ血走る佞武多の眼
 みちのくの鼓動よ佞武多来たりけり

大波の青溢し行く佞武多かな
 帰省子の跳ね尽くしたる脹ら脛
 肌寒の津軽を熱く跳人衆
 すつと上ぐ桴の白さや祭髪
 跳人より貫ひし鈴の月のいろ
 ひと夜さの水脈滲ませて佞武多去る
 身のうちに名残りの囃し髪洗ふ
 海鳥は潮目を平し今朝の秋
 夕風や工場の灯と定期船
 夏惜しむ手の中に鈴鳴らすとき

柴崎 英子

百の声

寒月や荒行堂に不開の門
 白緒下駄ととのふ寒行上がり口
 夜空押し上ぐ寒行の百の声
 をんをんと天ゆく寒行嘎れ声
 寒行の白衣に透ける髪膚かな
 水被る行者浄めの梅真白
 寒行の濡れ身に力みなぎれり
 てのひらに受く寒行の水しぶき
 爪先を濡らす寒行こぼれ水
 すくと起つ寒行僧の真直な眼

白梅の凜と香の立つ成満会
 寒晴や成満甘酒ふるまはる
 辛夷咲き法華堂裏風の鳴る
 声明の高む牡丹の芽のほぐれ
 荒行堂開け放ちあり雛飾り
 三楹の花のねむたき寺の昼
 御朱印帳の梵字墨の香あたたかし
 寺領出でず水尾をゆたかに春の鴨
 葺替の祖師堂深き檐の反り
 花の雲五重の塔に浮力充つ

柴田 近江
花 の 島

蚕の婚明日に祢宜来る花の島
 水脈太き帰漁にをどり五月鯉
 初鯉さばく手際の漁師飯
 港江の真昼のとろみ海月浮く
 船泊てに星の出揃ふ涼しさよ
 漁火の百花肴に暑気払
 切幣を呑んで波照る海開
 浜小屋の西日に褪せし潮見表
 風深き塩釜跡やカンナ燃ゆ
 糶果ての秋風に干す帆前掛

鳳仙花はじけ魚臭の町廃る
 野分来と投げる寄港の舫ひ綱
 不意打の浪に根釣の黙解けり
 暁雲のくれなゐ切つて鷹渡る
 捨て舟を艦よりさらひ狭霧急
 竹筵に吹かるる鳥の孤影冴ゆ
 朝市の焚火そだてる一斗缶
 灯台の影きはやかに日脚伸ぶ
 寒梅に群青尽くし浦曲風ぐ
 船笛が煽る岬の吉書揚

沖五十周年記念コンクール入選発表

●俳句の部

入選一位	神輿の町	森村江風
入選二位	神遊び	小倉征子
入選三位	佞武多	須賀ゆかり
入選四位	百の声	柴崎英子
入選五位	花の島	柴田近江
佳作一席	沙鳴	栗坪和子
佳作二席	湿原	小坂尚子
佳作三席	日の器	佐久間由子
佳作四席	祈りの文	牛島晃江
佳作五席	利尻・礼	大沢美智子
佳作六席	母の校	川高郷之助
佳作七席	煙づた	和田満水
佳作八席	秋干	朝長美智子
佳作九席	蘇生	木村あさ子

選考経過

俳句の部

五十周年記念コンクール俳句の部は20句で募集、応募総数67篇。作者名を伏せてコピーし、予選委員に送付。審査、採点后、辻美奈子編集長立ち合いのもと、オンラインによる予選選考会を実施。22篇を予選通過とし、さらに主宰が全篇を通読し選考後、3篇を繰り上げ通過とした。

25篇の作品を原句通りパソコンにて清記、校正の上、本選委員に送付。百点満点で採点を依頼、うち下位7篇(概ね予選通過作品の3分の1)を60点、ほかは適宜配点とした。結果は別表の通り。上位5篇を入選、以下五百点以上の9篇を佳作、うち会員作品1篇を努力賞とした。

●論文の部

入選一位	「芭蕉と杜国」	大久保志遼
入選二位	「俳人という「まれば」と」 <small>―鹿村登四郎句集「民話」を読む―</small>	鈴木光影
入選三位	「芭蕉とその時代」	大矢恒彦
佳作一席	「俳句の表記規定に 関する一考察」 漱石の詠んだ 家族の俳句	和田満水
佳作二席	「芭蕉句における 「行く春・秋」の一考察」	福島 茂
佳作三席	「努力賞」	白井秀明

論文の部

テーマは自由で募集。応募総数6篇。執筆者名を伏せてコピーを選者に送付。10点満点で審査を依頼した。上位3位を入選、以下2篇を佳作、会員による1篇を努力賞とした。

随筆の部

テーマは自由で募集。応募総数15篇。予選なしとした。執筆者名を伏せてコピーを選者に送付。10点満点で審査を依頼した。上位5篇、(3篇が同点につき同位)、以下2篇を佳作、会員による1篇を努力賞とした。

※三部門とも入選・佳作は主宰との協議によるもので、努力賞は主宰の意向による。

※論文・随筆一位作品は本号に掲載、以下、入選作品は順次沖誌に掲載する。